

翻 訳

## 北宋の銭荒： 幣制から流通体制に至るまでの考察

袁 一 堂 著  
安 蕪 幹 夫 訳

北宋に関しては、極めて豊富な経済史料が残っており、しかもそれらは後世の人々にとって長い期間に渡っての研究課題、特に銭荒問題を残した。近年「歴史研究」が新作を押し出して探討を行っているが、読後には相当に教えられるところが多い。<sup>(1)</sup>しかしながら、筆者はこの方面の数多い論文を子細に研読してみて、北宋の銭荒を起こした主要な原因については、まだ討議に値するところがあると思った。本文は宋代の幣制及び流通体制の角度から、北宋の銭荒について探究するつもりである。

### 一、北宋の銭荒成因の幾つかの質疑

(一)北宋の銭荒を起こした主要な原因について：昔の研究者の首位を占めた観点は、鑄幣量不足であり、現代の多くの研究者達は、宋代の自然経済の解体と商品経済の迅速な発展の結果だと考えている。この二種の見解が表明した意味は相同じて、北宋の鑄幣量は経済の発展に適應するだけのものではなく、現銭は欠乏し、<sup>(2)</sup> 転輸が困難だということに他ならない。またある研究者は北宋代に急速に増した茶、塩、酒、商税など諸種の貿易の総

(1) 喬幼梅、『從中唐到北宋銭荒問題的考察』、『歴史研究』1990年第2期。

(2) 同上。

額を子細に研究してから、毎年1億貫以上であるとし、北宋代の年間銭幣量は200万貫くらいしかないので、市場の需要を満たすことは出来ないと指摘した。<sup>(3)</sup> 筆者が提出した1500万貫の貨幣需要量は、貨幣流通の速さの要因(1:6.6)を考慮して算出した。商品経済発展説に対して、筆者は素より信じきって疑わないが、子細に推敲すれば問題点はかなり多いと思う。

まずはじめに、鑄幣量不足説は、ただ宋初の銭荒は解釈出来るが、宋の中葉以降の通貨欠乏を解釈することは出来ない。『宋史・食貨志下二』に、「自五代以来、相承周唐旧錢、其別鑄者殊鮮」とある。別鑄出来ない理由は、主として宋初には鑄幣に必要な材料が極めて欠乏し、四川の間では古墓を発掘して仏像や器用を熔かしても「才得錢四五、坐罪者甚衆」という現象を現出し、「然銅卒難得」という状態にあった。開国から至道年間まで、北宋の年間鑄幣量は一般的に10万貫を超えていない。「旧饒州、永平監歲鑄錢六万貫、平江南増為七万貫、而銅、鉛、錫常不給」とある。これをみると唐の大歴以後の年間鑄幣量と大体同じである。晩唐の財政貨幣収入は、毎年860-925万貫の間であって、<sup>(4)</sup> まだ銭荒は発生していない。宋初には上昇して1600万貫に到り、晩唐の2倍となって鑄幣量不足は明らかとなった。宋初で鑄幣量が最も多いのは大平興国8(983)年で、張齊賢が饒、信等州の山谷の銅、鉛、錫鉱を熟知している南唐承旨の丁釧を訪求してから、幣材の生産はやっと大きく突破した。「于是得銅八十一万斤、鉛二十六万斤、錫十六万斤、歲鑄錢三十万貫」<sup>(5)</sup>とある。しかしながらここで指摘しなければならないのは、宋初の銭荒はただ民間でしか発生してなく、そのことについては、民間で普遍的に省陌制が実行されたことがこのことを明示している。朝廷が77銭をもって100と規定したので、そのために民間では「以四十八銭為百者」ということもあった。欠乏によって招来

(3) 劉森、『北宋的銭荒』、『中州学刊』1987年第3期。

(4) 梁方仲、『中国歴代戸口、田地、田賦統計』、上海人民出版社1980年版、第286頁。

(5) 『宋史・食貨下二・銭幣』。

された貨幣の値上がりの幅は、中唐から五代の期間までの80か或いは85をもって100とするより厳しいものであった。しかし朝廷は、貨幣の不足を感じていない。宋初の賞賜の金額の多さ、持ち出しの贅沢さには驚かされる。開宝5（972）年に太祖が一回で「賜恩赦侯劉裨錢一百五十万<sup>(6)</sup>」とあることから分かる。太平興国7（982）年に太宗が「賜德恭，德隆常俸外支錢三百万<sup>(7)</sup>」とある。しかし鑄幣量が明らかに増加した宋の中葉以降にあって、朝廷は却って同じように銭荒を発生し、仁宗皇帝さえも日常の衣食を切り詰めるような暮しをしたが、これについては人に難解を与え、拙見は後ろに述べる。従って筆者は、鑄幣不足によって招来された銭荒は、せいぜい50年程しか影響してなく、そのあとの通貨欠乏のことについては、これをもって完全には解釈出来ないと思う。

太宗の至道中葉以後、北宋の銭幣鑄量はずっと比較的に多い。至道中には毎歳80万貫を鑄幣した。景德中には183万貫、天禧末には銅鉞を掘らないでやや減少したにもかかわらず105万貫に達した。皇祐から治平年間まで、歳鑄はみな170万貫以上あって、元豊年間には506万貫に達した<sup>(8)</sup>。上述の数字の多くは銅銭の数目で、北宋にはまだ広範囲にわたる鉄銭行使区域が存在していた。それも四川、陝西、河東だけではなく、まだ兩淮地区も存在する。ずっと絶えることなく徽宗の崇寧年間まで、朝廷は南方にある請錢監に鉄銭を盛んに鑄造させ、「并令舒，陸，衡，鄂錢監用陝西式鑄折十錢，限令歲鑄三十万緡，鉄銭二百万緡<sup>(9)</sup>」とある。官銭の鑄造量が多いだけでなく、また大量のさまざまな私鑄銭もまだ流通領域から退出していない。ただ資料の欠乏によって、総量の推定を作出することは出来ない。また北宋にすでに出現した白銀貨幣化の要素を考えれば、どうしても貨幣総量不足の結論は得られない。

---

(6) 『宋史・太祖紀』。

(7) 『宋史・太宗紀』。

(8) 『宋史・食貨下二・錢幣』。

(9) 同上。

宋の中葉以後の幣材の生産と冶鑄技術は、大量の貨幣を提供する能力を備えた。仁宗の皇祐中に、銅料の生産は已に518.8万斤に達し、これは清代の雍正年間の2-2.5倍である。元豊年間の歳収銅料1460.5万斤は、已に清の乾隆31（1766）年の1467.4万斤のレベルに達していた<sup>(10)</sup>。胆水浸銅の使用と冶煉のための石炭や炭の大量の使用は、明らかに宋代の鑄幣の条件を改善した。だから彭信威先生が宋代の年間鑄幣量を平均約200万緡前後と推定することは、絶対に大げさなものではない。この200万緡を以て計れば、至道中から元祐の末までの約100年間に少なくとも累計して鑄幣量は20000万緡であり、この年の鑄幣量200万緡と需要量1500万緡との比較は絶対ではない。この矛盾を、当時の人張方平は已に発現していた。彼は「自太祖平江南，江，池，饒，建置炉，歳鼓鑄至百万緡，積百年所入，宜乎貫朽于中藏，充足于民間矣，比年公私上下并苦乏錢，百貨不通，人情窘迫，謂之錢荒，不知歳所鑄錢今将安在？」<sup>(11)</sup>とある。後世の人は、金属貨幣が磨損しにくく、しかも歴年蓄積しやすい特徴を軽視したので、当然鑄幣量不足の結論を得た。

宋代の商品経済が、唐代のそれと比較して明らかに発展していたことは言うまでもない。しかしながら、晩唐の鑄幣量に比較して数十倍に到ったとしても、やはり経済の需要を満足できない程度であったのか、これは人に疑いを抱かせる。筆者は曾て古代の貨幣を考察するために経済の幾つかの指標を入手して、例えば貨幣財政収入総額、貨幣収入が占める比重、工商税額、貨幣地租比重、官費と軍費の中に占める貨幣の構成要素など、唐宋兩代の経済実態と貨幣経済についておおまかな研究をやったことがあるが、紙数に限りがあるのでここでは叙述を展開しない。わずかに鑄幣量と一人当たりの平均占有量（唐代で最も多い天宝年間の数字を以てスタート・ラインとする）を時代的に比較したものを掲げるが、詳しくは下表に示

(10) 彭擇益、『中国近代手工業史資料』第1巻，中貨書局1962年版，第350頁。

(11) 『中国貨幣史』，上海人民出版社1958年版，第300頁。

(12) 『宋史・食貨下二・錢幣』。

朝代	鑄 銭 (万緡)	資料来源	戸 数 (万)	口 数 (万)	資料来源	戸 均 (文)	人 均 (文)
唐天宝11年	32.7	『新唐書・食貨志』	961.5	5288	『旧唐書・玄宗紀』	33.9	6.18
元和元年	13.5	同上	2147.4		「唐会要」卷84	54.6	
宋至道中	80	『宋史・食貨下二・錢幣』	2088.2	4673.4	『宋史・地理志』	38.3	17
					『通考・戸口』		
景德中	183	同上	741.7	1628	『宋会要輯稿』食貨11	246	112
治平中	173	同上	1291.7	2909.2	『長編』卷203	144	60
元豊3年	506	同上	1673	2383	『宋会要輯稿』食貨11 『長編』卷310	302.4	212.3
明洪武26年	19	彭信威『中国貨幣史』	1065.2	6054.5	『明万歴会典・戸部六』卷19	17.8	3
清康熙60年	43.7	『清史稿・食貨志・錢法』	2538.6	10154.4	『清聖祖実録』295	17.2	4.3

す。

唐代では、一人当たりの年平均で、占有する鑄幣量で最も多いものでもせいぜい10文を超えないが、宋の中葉以後では、最も控えめな推定でも60文より低くなることはない。元豊年間には、一人当たり平均でも200文以上に達した。この問題について、筆者は史学界の宋代人口の記載が明らかに偏少した研究であるかどうか十分に注意をした。宋代の一人当たりの平均人数は、二人よりやや多い。史書に掲載された人口統計の数字は、実際の数字より少ないかも知れない。このことより「戸均」という項目をわざわざ設ける。宋代の戸数統計は、大体確かなものである。そこで戸均より計算すれば、唐の6-10倍であり、しかも主としてこれは官鑄銅銭の数字で、鉄銭と私銭はまだ計っていない。これを明の洪武26年の3文前後、清の康熙60年の4、3文前後と比べれば、数十倍と高くなっている。勿論、清代には白銀が已に貨幣となっているので妥当性は弱い。上述の比較研究を通じて、大体宋の中葉以後の銭荒は「鑄量不足型」に属していないと判断できるので、別の角度から原因を求めなければならない。

(二)宋代には「貨幣外泄」の歴史記載が多く残っているが、ある人が推定したような厳しいものなのか、外泄の程度が銭荒を十分に招来するものであったのかどうか、これも疑問を持つに値することである。

まず、宋代の商品経済が明らかに著しい発展を遂げたことは、歴代前朝と比較して言ったことである。総体的には、北宋代は自然経済がやはり絶対的な支配地位にあって、税賦の構成は少なくとも宋中葉以前にはやはり実物をもって主としていた。即ち、所謂「凡歳賦谷以石計、錢以緡計、帛以匹計、金銀絲綿以兩計、蒿秸薪蒸以罔計」<sup>(13)</sup>とある。宋代の「以貫石匹斤定年額」というのは、それ自体に朝廷が徴収した賦税の中に占める貨幣の程度が高くないことを反映している。これによって北宋の辺境貿易の数額(主としては土・特産品と手工業品)が多すぎるというのは不可能であって、貿易方式の主要を占めるのは実物交換の形式である。かなりの数の論者は往々にして北宋が河北榷場で契丹羊を博買するのに、一回に消耗された費用は40万緡を過ぎた事例をもって、北宋の貨幣の外泄を証明する。しかしながら同じように『遼史』にも「以羸老之羊及皮毛易南中之絹、二下為便」という記載があって、宋遼の辺境貿易は「二下為便」の実物交換方式をもって主としていることが反映されている。特に指摘しなければならないのは、北宋に厳しい銭荒が発生している間に、遼の国内では金属貨幣が不足していることが無いということである。「自太祖始并室韋、其地産銅鉄金銀、其人善作銅鉄器」とある。領土の拡大につれて、遼の境内の銀、銅、鉄鋳が続けて増し、鑄幣の需要の物質条件は基本的な保障があって、「自此以訖天祚、国家皆頼其利」とある。石敬瑭が幣を寄付したことと、大安山の劉守光の蔵幣を発掘したことによって、遼の貨幣の供給は極めて充足され、「每歳春秋以官錢宴飡將士、錢不勝多」とある。その時「雖未有貫朽不可較之積、亦可謂富矣」<sup>(14)</sup>とある。少なくとも開国から道宗大安年間(宋初から哲宗元祐年間に至る)まで、遼は未だ通貨不足が発生したことはなく、遼が北宋の貨幣を争奪し、これをもって本国の商品流通を支えるための条件的な背景は存在しない。これは後の金が紙幣をもって主として、宋金の間に銅幣の争奪が発生したこととは全然違う。宋遼の辺境貿

(13) 『宋史・食貨上二・方田賦税』。

(14) 以上均見『遼史・食貨志下』。

易は、貨幣が互いに流出したり流入したりしており、このことは正常な貿易の往来である。宋人は、国内の貨幣が極めて欠乏の状況下において、貨幣の外泄に対しては敏感になっており、いくらか記載を残したことは奇とするに足りなく、その外泄の数量に対しては高すぎるとは推定できない。北宋の国内ではまだ地区性の割拠があって、貨幣の流通や滞りの状況が相当に厳しく、どうして大量の貨幣がたやすく境外へ流れていけるのか。

その次に、北宋の西北、西南辺境の貨幣外泄の状況を分析する。北宋代には、西北辺境の陝西、河東はずっと鉄銭行使区域で、西夏に流入してもそれは主として鉄銭である。記載されたものを見ると、上述の二路、すなわち陝西と河東は少し鉄銭が多すぎ、銭幣が壅閉して物価は急騰し、これをみる限りでは鉄銭の外泄と宋代の銭荒とは因果関係を構成しない。西南地区は、則ち北宋代を通じて鉄銭区である。銅銭が川蜀に流入することはまた禁止され、その上に西南「諸夷」に流入することが一層禁止されていた状況下において、数量が多いはずはない。

また次に、宋代の海外貿易を見る。宋代の航海業は発達し、海外貿易に十分有利な条件を提供したが、宋代の海外貿易はただ宋初に短期の民営海外船販業務が隆盛しただけで、やがて厳しい政策制限をもってこれに代えられた。「私与蕃国人貿易者、計値滿百錢以上論罪、十五貫以上黥面、流海島<sup>(15)</sup>」とあり、また「擅乘船由海入界河及往高麗、新羅、登、萊州境者、罪以徒、往北界者加等<sup>(16)</sup>」とある。これをみると、地方の海外貿易に対しては厳しい制限を実行している。中央政府が広州、明州、杭州に設けた「市舶三司」を、後に「九司」と広げ、「掌市易南蕃諸國物貨航舶<sup>(17)</sup>」とある。対外貿易の海上通路は、しっかりと取り締まる。どうして海外貿易で高度な独占が行われるか。また国内においても、厳しい銭荒の状況下において巨額な銅幣が海外へ流出することが想像できるか？

(15) 『宋史・食貨下八・互市舶法』。

(16) 同上。

(17) 同上。

最後に、上述した方面を除いて、我々はまた貨幣外泄の巨視的な制約に、十分な見通しを持つべきである。北宋の錢幣闌出の律令については、相当に厳しいものがある。宋初においても、既に銅錢の江南、塞外、南蕃諸国への闌出について規定している。錢を携えての出国は「至二貫者徒一年，三貫以上棄市<sup>(18)</sup>」とある。3緡の銅錢で即ち棄市（街頭で死刑にする）にあてるとは、民間に対して威嚇の意味をなさない。後に北宋は錢禁を削除して闌出令を弛め、「辺関重車而出，海舶飽載而回，沿辺州軍錢出外界，但每貫收稅錢而已」という情況をもたらしたけれども、これは熙寧中葉以後のことであって、これ以前の貨幣外泄はどうしても巨視的な制約を受けたことになる。

(三)宋初に封樁庫を建立し、太宗はこれを拡大して内蔵庫と為して大量な貨幣を蓄積して放出せず、相当な数量の貨幣を実際に流通領域から退出させたことは、確かに通貨の欠乏をもたらした重要な原因であるが、まだ二カ所に疑問がある。その一つは、錢幣が大量に封樁されることは、主に宋初に発生している。太祖は「石晋割幽燕諸郡以歸契丹，朕憫八州之民久陷夷虜，俟所蕃滿五百万緡，遣使北虜，以贖山後諸郡，如不我從，即散府財募戰士以圖收取<sup>(19)</sup>」と言った。すなわち、講武殿の後に庫を建てて封樁と号し、これが内庫に大量の貯錢をした始まりである。しかし、その後に左蔵庫に続けて貸与して軍国の急需に応じたことは、少なくとも宋の中葉に至ってからであり、内庫の封樁錢はすでに日が経ち、その蓄積は多くはなかったはずである。皇祐中の歳入265.7万緡、治平中は下降して193.3万緡となり、「其出以助軍費不可勝計」とある。真宗の景德中にはすでに「用度不得下屈<sup>(20)</sup>」となった。仁宗の慶曆3（1043）年に范仲淹が書を上りて事を言う時に「今窘於財用<sup>(21)</sup>」と言及している。富弼もまた「国用殫竭，民力空

(18) 『宋史・食貨下二・錢幣』。

(19) 王辟之、『澠水燕談錄』卷一。

(20) 『宋史・食貨下一・會計』。

(21) 『統資治通鑑長編』（以下簡稱『長編』）卷一四三。

(22) 同上、『歷代名臣奏議』第三一七。

<sup>(22)</sup> 虚」と言っている。蓄積された大量の貨幣はみなどこに放出されたのか？ その二は、もし大量の貨幣がいろいろなルートを通じて、已に民間に放出されていれば、民間の銭荒の災いは少なくとも部分的な緩和を得ることができる。しかし宋代の経済史料をあちこちめくって調べてみても、このような記載が見つけれなかったばかりでなく、かえってこの期間の銭荒がもっと厳しいものであったことが分かった。これは難解なことである。

(四)私銷もまた北宋銭荒の成因の一つであると多くの研究文章が列挙しているが、ただ一般的に私銷を論じなければ、問題を説明できない。銭幣を私銷するには二種の方式がある。即ち私銷してから器を鑄することと、私銷してから幣を鑄することである。中国貨幣史を考察してみると、一般的な状況下にあつては、私銷は往々にして私鑄と同時に発生する。即ち良質のものを銷じて劣質のものを鑄し、重いものを銷じて軽いものを鑄する。私銷して鑄鑄することは、官銭の数量を減少することはできるが、ただ一層私鑄の数量を増加させる。幣を銷じて器と為せば、直接貨幣の減少を招来して銭荒をもたらす。

## 二. 北宋の幣制の核心問題：幣値と幣価の平衡を失う

(一)もし宋初の銭荒をもたらした主要な原因が鑄量不足であると説明すれば、北宋中葉以後の銭荒の原因は、貨幣制度それ自身から招来されたものである。貨幣自身の値、価の失衡によって私銷と私鑄をもたらす原因は、大量の貨幣として、或いは私鑄者の原料と成しているところに渋滞し、或いは熔鑄して器と為して民家にこっそり隠していたからであり、そのために強大で独立した官営鑄銭業以外のものを営み、そして官営鑄銭業と幣材を争奪するような社会力量を形成して、有限な銅料生産を日増しに消耗しているばかりでなく、同時に大量の官幣を呑食し、幣材と銭幣の二重の不足をもたらしている。

宋代の銭法は、唐の旧制を受け継いで、唐の武徳4年に隋の五銖銭を廃除して開元通宝を行使した。開元通宝は「径八分、重二銖四、累積十文重

一兩、千錢重六斤四兩<sup>(23)</sup>とある。1錢を文となし、1000錢を貫(緡)と為して古代錢幣通宝系列の光を開き、後世に与えた影響は極めて大きい。開元通宝は含銅量が高い(83%)だけではなく、製作も精緻で、しかも唐から宋までの貨幣の中で重さを比較すれば重い方である。『旧唐書・食貨志』に「新錢輕重大小最為折衷」とあり、『新唐書・食貨志』には開元通宝を説明して「得輕重大小之中」とあって、開元通宝の幣値と幣価を比較すれば適応しているとみな言っている。マルクスは「商品が価値を持っているのは、社会労働の結晶である。……各商品の対応価値は、この商品の中に含まれている消耗されたもの、具体的に現われたもの、凝固された労働量或いは労働額等によって決定される。」<sup>(24)</sup>と言った。金属貨幣は一般的な等価物の商品に充当するものとして固定されるが、それ自身の価値は、鑄幣する時に消耗された労働によって決定する。これによって我々は、十分な理由を持って唐中葉の鑄幣の生産原価は比較的に低いことを認める。証拠は三つある。その一は、天宝年間に「每千錢費七百五十」<sup>(25)</sup>とある。生産原価と利益とを比較すれば、利益は25%と為る。その二は、宋初までのことを張本賢は南唐承旨丁劍の「詢旧錢法」にその結果を、「惟永平(監)開元錢料最善」<sup>(26)</sup>と述べている。その三は、唐の天宝年間が北宋の至道以前における中国古代官営鑄錢業の発展の高峰であり、全国で鑄錢炉99座、歳鑄額32.7万緡であるが<sup>(27)</sup>、これはただ有益無損或いは損が少ない条件の下でやられている。中唐以後の情況は全く違って、貨幣の實際価値はすでに明らかにその名目価値(幣価或いは当量)より高い。建中元年の江淮錢監の鑄錢は、「度工用轉運之費、每貫計錢二千、是本倍利也」<sup>(28)</sup>とある。幣値はすでに幣価の2倍以上に高出した。貨幣の値、価の失衡は、民間の私銷して

(23) 『旧唐書・食貨志』。

(24) 『馬克思恩格斯選集』第2卷、第170頁。

(25) 『新唐書・食貨志』。

(26) 『宋史・食貨下二・錢幣』。

(27) 『新唐書・食貨志』。

(28) 『旧唐書・食貨志』。

から利を得るといふ現象から反映されたもので、「錢一千為銅六斤，造写器物，則斤值六百餘，有利既厚，銷鑄遂多」とある。1貫をもって本とすれば，幣を熔かして器と為せば，利は3.6貫を得て，2.6倍と為った。この種の幣値が幣価より高い情況は，宋代には更に厳しくなり，「銷熔十兩生得精銅一兩，造作器用，獲利五倍<sup>(29)</sup>」とある。貨幣の値，価の差が厚利をもたらしたことは，普遍的に民間の私銷を刺激し，これは貨幣外泄の危害よりもっと深刻であった。

貨幣の實際価値は幣価より高く，その原因は鼓鑄の原価が高すぎるといふことを除いて，後一つの重要な原因は，幣材—銅料の価値が高すぎるといふことである。唐の劉秩は曾て銅価が高いことが鑄銭業に影響すると言及した。「夫鑄錢用不贍者在乎銅貴，銅貴在乎採用者衆<sup>(30)</sup>」とある。この言葉は，ただ半分だけは正しい。価の高い銅料を使用して錢を鑄することは自然に欠損が発生しやすく，費用の「不贍」をもたらす。しかし銅価の高い原因は，銅料を採治する際の消費費用が高いことで，決して「採用者衆」ではないのではないのか。宋初には鼓鑄の生産原価を下げるために，銅の使用を少なくして多くの鉄の使用を試み，「以藥化鉄，以銅雜鑄」，「費省而利厚」とある。ただ技術の面ではまだ低いので「申雜以鉄，流涇而多就，工人苦之」とある。一カ月あまりでわずかに万錢しか鑄し得ないので，止むを得ずやめた。鑄錢の生産原価は，宋の中葉に比較的大きな降低をみせたのを除いて，宋初と南宋はみな比較的に高い。南宋の紹興年間「每鑄錢一千用本錢二千四百」とある。南宋の錢の重量も北宋より軽くなった。

銅の価値が高くなれば，直接的には私銷をおこす結果となった。もし私銷を厳禁すれば，民間に蓄積された各種の銅料の貯蔵は隠れてしまわず，更に銅の発掘も簡単ではなかった。北宋の銅禁は相当に厳しく「旧犯銅禁七斤以上棄市」とある。しかし死を冒して禁を犯す者が多かったので，「待扱常淹援」とあるように，止むを得ず咸平4年に詔して改め，50

(29) 『宋史・食貨下二・錢幣』。

(30) 『旧唐書・食貨志』。

斤以上に満つる者は裁判に持ち込み、その外の者は次第に減じるようにした。<sup>(31)</sup>これは宋初の深刻な銭荒が存在している状況下において、民間ではなお大量の銅材が隠されていたことを反映しているが、ただこれは行政手段において流出に導く法ではなく、まもなくやめられた。

(二)私鑄の原因について、流行している見解は鑄幣の質量が低劣で、含銅量の値が額面金額より低い時に私鑄の風が盛んになっていると言われている。実にこれはただ問題の一面的なもので、これでは官鑄の貨幣が精良の状況下においてでもどうして私鑄が起こったのかについては解明できない。銭が高くしかも欠乏したことは、総体的には社会の私鑄を激励した客観的な環境を形成し、これが問題の源である。銭が高い、即ち幣値が幣価(額面金額)より高いことが私鑄者に幣値を漁り、利を謀る条件を提供し、これが私鑄の風が盛んに行われた直接の要因で、厳しい刑法があっても止められない。即ち、所謂「今塞其私鑄之路，人猶冒死以犯之」<sup>(32)</sup>である。銭が欠乏することが、則ちすでに質を下げた幣値(重さを減じ、いろいろなものを混ぜる)の貨幣に需給市場を提供した。劉秩は曾て「公錢重与銅價頗等，故盜鑄者破重錢以為輕錢」<sup>(33)</sup>と言ったことがある。これはすなわち私鑄は銅幣値の含量が少ない時にのみ発生したのではないことを証明している。いくつかの手工製造工程を経、加工制作したのちに成された銅銭は、ただ原銅価と等しく、幣値が偏高していることを説明したのであり、この種の状況は宋代に至っても大きな変わりはない。宋初、相当な数量の官幣が私鑄者の手を経て、軽く劣った私銭と成って坊市に満ち満ちた。しかも朝廷が私鑄を厳禁し、幣制を統一した措置は、実際上は強いて流通手段機能を持っていた大量の私銭を流通領域から退出させて、更に銭荒を激化させた。貨幣の不足、幣材の欠乏、鼓鑄の生産原価の高昂等の諸要素の総合作用は、北宋をして度々大銭を鑄せしめた。一大巾に幣価(当量)を高め

(31) 以上均見『宋史・食貨下二・錢幣』。

(32) 『旧唐書・食貨志』。

(33) 同上。

させて、困難な境遇を脱却する措置は、一回ごとに大銭を铸じると、また次の時には更に盛んな私铸の風を誘発して、屢々禁じて屢々铸じ、禁ずれば禁ずる程激しくなった。北宋の大観年間、私铸をもって業と為す者が非常に多く、「天下凡以私銭得罪，有司上名数亡慮十余万人<sup>(34)</sup>」とある。意外にも10万人が私铸業に従事していることは、多少官幣と銅料とを侵していることが想像できる。

(三)大銭を铸造して発行することで、社会に私铸を誘発した記載は早く、すでに唐代に見えた。唐の乾元年間に乾元通宝を铸して、「以一当十」とある。更に重輪乾元銭を铸して、「以一当五十」(後に降して当三十と為す)とし、長安城の中では競って盗铸を為し、犯罪者は絶えなかった<sup>(35)</sup>。唐が減んで未だ久しくはないので、先人の教訓が目の前にある。しかし宋代の支配者は、教訓を吸み取っていないようである。慶暦年間に当十の銅銭、鉄大銭を铸し、その結果は民間に「盗铸者衆，銭文大乱」とある。蔡京が政権を担当した期間には屢々大銭を铸したが、毎回例外なく更に激しい私铸風を引き起こした。幣価が幣値より低くなっている以上、幣価(当量)を大巾に高めることが合理的であるのに、どうして行われぬのか?原因はすなわち大銭を铸造したことにあり、大銭と基準(当一)貨幣との間のレート<sup>レートの</sup>の平衡を失わせたことにある。慶暦年間の大銭をもって例と為して、「銅大銭一当小銭十」と言っても、実際には只三にしか値しない。すなわち「大約三小銭可铸当十大銭一」とある。民間で小銭を持っている者が、もしこれを続けて使用すれば2/3以上の損失を受けるので、即ち熔幣私铸せずして、また只藏匿して用いなくて値の上がるのを待ってから売った。大銭を铸造して流通させることは、新旧貨幣のレートの失衡を起し、更には多くの良幣を私宅へ追ひ払って封貯に向かわせ、国の貯藏不足を引き起こして民間では銭が欠乏した。毎年続けて铸造された銭はかなり多いが、やはり坊場には流入しにくかった。これは宋の中葉の「公私上下并苦乏銭……

(34) 『宋史・食貨下二・銭幣』。

(35) 『旧唐書・食貨志』。

歳所鑄錢今將安在」が答えの一つである。文章の長さに関りがあるので、本文では北宋の貯蔵の盛んな例証は煩挙しようとは思わない。貯蔵の風の盛行が商品意識を強め、蓄財が癖と成るなどの表面の現象だけでは決して解釈できず、ただ適当に金を儲ける機会があれば、貨幣が流出しないことはない。例えば、太平興国8(983)年に官吏が「以月俸所得銅錢市于民、厚取其值」という例が発生した。淳化年間には、官の家族が「以奉錢易于民以規利」とある。兌換の比率は「小錢二或三易大錢一」とある。これは宋代貯蓄の盛行はかなり大きな程度で行われており、貨幣制度自身の反証の源とされる。そうでないと、銅料生産は元豊年間にはすでに1460万斤に達しているが、政和2(1112)年には却って鼓鑄用銅料が不足しているので解釈は容易にできず、「令諸路銅錢監改鑄夾錫」と言う現象も発生している。大量の銅料はどこに行ったのか？

最後に指摘しなければならないのは、大錢を頻繁に鑄行している状況下で、私鑄を禁息させることは極めて容易ではないことである。軽く禁じれば則ち止まらなく、「非重禁不足以懲息」である。しかし厳しく禁じれば又私鑄者は幣材を隠すという形態をもって逃げ隠れ、大量の銅料の損失を引き起こす。大觀元年に錢法御史帳茂直は、曾て州県が私鑄者に対して監督逮捕をさらに厳しくすれば、「小黄錢投委江河，不敢復出」，「舟船附帶者亦多棄之江河」<sup>(86)</sup>の結果になったと言った。このことは社会の銅資源の重大な損失が存在していることを疑うことはできない。

### 三. 北宋の貨幣流通体制の癌：放出と回収との食い違い

宋代は商品経済の空前的な発展の時期で、国家財政の社会経済の発展の中で起こった作用と影響はともに、前の歴代王朝を超えた。国家は単に法定的なものだけではなく、唯一の貨幣鑄行者であり、鑄幣は朝廷の主要的な収入源の一つを構成し、しかもかつ国家はまた社会が求める貨幣の主要な放出者でもあった。統一的な、中央集権的な財政体制の建立が、北宋国

(86) 以上引文均見『宋史・食貨下二・錢幣』。

家財政をして毎年新鑄した貨幣の全部及び社会流通貨幣の一部（貨幣賦税の形式をもって）を中央に集中させしめ、宋代経済発展をして需要する貨幣の数量の大きな程度を、中央財政の放出を依頼せしめた。銭荒の成因の一つは、まさに貨幣の放出から貨幣の回収までの食い違いの上に発生した。

唐宋財政体制の区別点は、北宋は大きな程度で中唐以後の藩鎮割拠体制を避けたことにある。唐の天宝以後、「方鎮握重兵，皆留財賦自贍，其上供殊鮮」とある。藩鎮割拠は、中唐以後の中央財政の地位を厳しく弱めた。宋の太祖は即位してから、早速統一的な財政体制の建立に着手し、「諸州府支度經費外，金帛悉送闕下」<sup>(37)</sup>、「外州府無留財，天下支用悉出三司」とある。統一的な財政体制は、同時に独占的な貨幣放出体制を兼ね備えている。皇権の需要を強めての出費は、北宋もまた唐代の内庫制度を踏襲している。「凡貨賄輸京都者，至則別而受之，供君之用及待辺費則歸于内蔵，供国之用及待經費則歸之于左蔵」<sup>(38)</sup>とある。大量の銭幣が内庫に貯蔵され、封椿して発しないことが銭荒を引き起こした原因の一つであるということについては、学术界で多に論究されているのでここでは贅言しない。ただ一点について説明を補充したいことは、宋代の毎年の新鑄貨幣（主として銅幣）は、原則的にはまず全部内蔵に帰入しなければならないということである。「諸監所鑄錢悉入手王府，歳出其奇羨給之三司，方流布天下」<sup>(39)</sup>とある。天禧2年には、「歳入饒池江建新鑄緡錢一百七万，而斥旧蕃緡錢六十万于左蔵庫，率以為常」<sup>(40)</sup>とある。この一つの要素を考えれば、宋初には実際に社会に放出された貨幣数量は、もともと数額が大きくなり、歳鑄量よりまた少ないことが分かった。内庫の貨幣は古いものが山積され、「天子之私蔵」と成って、民間では自然に銭荒が発生した。

(37) 以上見『宋史・食貨下一・會計』。

(38) 『宋会要・職官二七』。

(39) 『宋史・食貨下二・錢幣』。

(40) 『宋史・食貨下一・會計』。

宋の中葉以後、内蔵の貯蔵は殆ど空になった。『欒全集』巻24、請裁減賜賞事には、「自康定，慶曆以来，発諸宿蔵，以助興費，百年之積，謂存空簿」とあり、『宋史・食貨下・會計』にも、「其出以助經費，前後不可勝計，至于儲積羸縮」とある。錢幣の封椿が錢荒を醸成したという説明は理解しやすいが、「百年之積」を已に放出し、しかもこの期間はまた北宋の鑄幣の高峰期であるのに、「民間錢少」の大衆の声がやはり多く記載されていることは、人には理解できない。例えば慶曆3（1043）年に歐陽修は東南諸路の情況について、「淮甸近歳号为錢荒<sup>(41)</sup>」と言及している。熙寧初年に至るまで、兩淮と荊湖地区ではやはり「難得見錢」の情況を伝えている。「錢荒之患」が緩やかになった徴候は、いささかも見えない<sup>(42)</sup>。本當に「百年之積」の錢幣をもって社会に放出しても、やはり商品經濟の急速に發展した需要を満足させ得ないのか？問題は、流通環節節に発生しているのかも知れない。

宋代の財政（実物と貨幣を含む）支出は、主として官費、軍費、郊祀、内廷供奉、賞賜、土木工作、市易、和買、和糴、振恤などである。上述の財政支出の項目の中であって、ただ後の5項（土木工作、市易、和買、和糴、振恤）だけは多かれ少なかれ貨幣を直接に民間に放出することができ、しかもかつ多くの支出は預貸の性質を持っている。その他の諸項の支出については、貨幣の放出は主に達官顯貴、将官兵士、王公府第の私蔵に入り、第二次的な過程で坊市の貨幣から、すなわち商品の交換過程で民間に流通する。しかし宋代の官費、軍費などの項目の中で豊富な実物の供給部分は、上述の非生産者階層の商品市場に対する依頼を低下させ、客觀的には貨幣の市場への流れを阻み、一旦放出して外へ出て行くと、即ちかなり大きな部分が転化して貯蔵貨幣となり、再び流通領域に進入しなくなって放出の方が多く回収の方が少ない結果をうむ。これは宋の中葉以後の「公私上下并苦乏錢」のまた一つの重要な原因である。官費と軍費は北宋の財政支出

(41) 『歐陽文忠公集』巻九九。

(42) 蘇轍、『欒城集』巻三七。

の重要なものであったので、ここではこの二項をもって例として分析を試みる。

(一)官費。宋代商品経済は、より大きな発展があるが、ただ官費の方面にのみに反映して貨幣化の程度はなおかなり低く、基本的には殆ど唐代の特徴を継承し、実物部分がより大きな比重を占めている。端拱元(988)年、太宗は詔して、「廩祿之制，宣從優異，庶幾豐泰，責之廉隅<sup>(43)</sup>」と言っている。厚祿が「聳其廉洁」，「絶請之弊」をもっての名義の下に，宋王朝は各級の官吏に対して極めて優厚な物質的な待遇を提供している。唐と宋との相同じ品階官員の正俸を比較してみると，宋の方が高いようである。しかも正俸以外のその他の待遇をみても，更に唐代の官吏とは比較できないものがある。ただ正一品をもって例と為してみると，唐の一品官は月俸31000<sup>(44)</sup>，歳祿700斛である。宋の宰相，枢密使は月俸300000，歳祿1200石(月100石)である。この外にもまた相当数量の春冬の服飾を作る綾，絹，冬綿などの実物が供給されている。官階の高低の区分によって配給に多寡の区別があり，次第に遞減していて大体がこのようなものである。他の待遇になお職田，職錢，隨身兼人衣糧，兼人餐錢，茶酒厨料の給，米麵羊口の給，薪蒿炭塩の給，飼馬芻粟の給，増給，給券，公用錢等がある。厨料は「斗」をもって計り，薪蒿は「束」をもって計り，塩は「石」をもって計り，炭は「秤」をもって計る<sup>(45)</sup>。宋代の官吏の豊厚な実物供給制と官費補貼制とは，殆どすべてが含まれていないところが無い程度に達し，その結果官吏は市場で貨幣を使用することがなかった。即ち市場で商品交換を経る必要がなかったのである。要するに彼らは，優雅な生活ができる状況と便利な官吏としての状況とをすぐに享受でき，俸給として支給された貨幣は貯蓄されて使用の範囲は極めて狭い。ただ土地を購入する時と，高級消費をする時にもみわずかに貨幣が必要となるだけである。そうであれば，貨幣の主要

(43) 『宋史・職官十一・奉祿制上』。

(44) 『新唐書・食貨志』

(45) 以上見『宋史・職官十一・奉祿制上』。

な流通対象者は土地所有者（倒産した小農を含む）と富商大賈で、農桑業等基本的な生産に従事している人々の家には非常に流入しにくい。これらのことを明らかにすれば、所謂「京城資産百万者至多，十万而上比比皆是」<sup>(46)</sup>、「豪猾兼并之家，居物逐利，多蓄緡錢三五万以上」<sup>(47)</sup>とあることが珍しいことだとするには足りない。

宋の中葉以後には官吏の数が激増したので、官費の支出が財政の面で重い負担となった。唐の建中年間「文官千八百九十二員，武官八百九十六員左右」<sup>(48)</sup>、「歳給錢六十一万六千余緡」<sup>(48)</sup>とある。しかし宋の咸平4（1010）年「裁汰諸路冗吏十九万五千余人」<sup>(49)</sup>とある。この数は、まだ減らしてない者がこれより少なくないのかも知れない。仁宗の宝元以後、「宗室吏員受祿者万五千四百四十三」<sup>(49)</sup>、「祿廩奉賜從而増広」<sup>(49)</sup>とある。熙豊年間、宋の王朝は官吏に対してまた屢々俸祿を増加し、熙寧年間にはわずかに一回だけで、「京師増四十一万三千四百余緡，監司，諸州六十八万九千八百余緡」<sup>(49)</sup>とあるが、増額は110万緡を超えている。後に翟思はこれをもって元祐党人に対して「財利既多散失，且借貸百出，而熙豊余積，用之幾尽」<sup>(50)</sup>と疏証している。誰が責任を負うのか、このことに関しては本文との関係が大きくないので、しばらくは評論しない。歴年の蓄積の圧倒的な部分が、官費に消耗されたことは確実な歴史事実であるかも知れない。趙翼は曾て宋代の官制を評価して、「給賜過寵，究于国計易耗。恩逮于百官者，惟恐其不足，財取于万民者，不留其有余，此宋制之不可法者也」<sup>(51)</sup>と言っている。貨幣流通の角度から評価すれば、「給賜過寵」となり、客観上はある部分のものが貨幣の市場への流れの向きを阻断し、貨幣が放出されても中間の環節で大量に沈澱させられ、民間で見銭を得ることが難しいこととなる。従って

(46) 『長編』巻六五。

(47) 宋祁，『景文集』巻二八。

(48) 『新唐書・食貨志』。

(49) 趙翼，『廿二史札記』巻二五，『宋冗官冗費』。

(50) 以上見『宋史・食貨下・會計』。

(51) 『廿二史札記』巻二五，『宋制祿之厚』。

貨幣を再び回収することも必然的に極めて困難なものに変わった。

(二)軍費。国防と内政需要から生じて、北宋は一代を通じて一定数の膨大な軍隊をずっと維持し続け、軍費もまた財政の主要支出項目であった。北宋の軍隊は、官兵の待遇がただ優厚ばかりでなく、官俸と相同じ特徴があり、即ち実物の支給に貨幣を加えることである。軍隊の兵員の数は、全部で真、仁宗朝には100万以上がおり、軍費の支出は勿論少なくなかった。記載されたものを見ると、ただ燕山の郭葍の師の常勝軍を率いた一軍だけで、「計口給錢廩，月費米三十万石，錢百万緡<sup>(52)</sup>」とある。ただこの一軍の年費だけでも1200万緡に達している。筆者は曾て皇祐年間の川陝軍の官兵構成の比例と、必要とする軍費とを例と為して官、兵の年間貨幣収入について测算したことがあるが、平均して毎官年費は2943貫、士兵は年費62—70貫<sup>(53)</sup>で、史料の記載と大体符合している。士兵の実物支給の範囲は小さく、また保障の程度の差によって貨幣が市場へ流れ出る可能性は、当然大きなものとなるであろう。

#### 四. 結 論

北宋一代を通じて、少数地区（主として陝西，河東，川北などの鉄銭区，同様にまたこれも宋の中葉に大量に集中して駐軍した地区）で通貨の膨脹を発生した以外には、前述している全体の内容から見れば、最初から最後までずっと通貨の欠乏—銭荒問題を解決することができなかった。銭荒の特徴及び形成の原因は、明らかに段階性を現出している。第一段階は宋初から至道中に至るまで、幣材の甚だしい欠乏，鑄量不足，銭は上に封ぜられて庶民は下に欠乏し，「鑄量絶対不足型」と言われる銭荒であった。第二段階は至道末から崇寧年間に至るまで，幣材の大量採治と鼓鑄技術の向上につれて，鑄幣量は激増した。しかし辺事が屢々起こったので，官費，軍費をもって主体と為す財政の支出は，日増しに増加し，朝廷は財政危機

(52) 『宋史・食貨下一・會計』。

(53) 参看拙文『論北宋中期的財政危機』、『史学月刊』1990年第3期。

と通貨危機を緩和するために度々貨幣の虚価を高めること一大錢を鑄することを主要な措置と為した。しかしこれは更に幣制の混乱を激しくする結果となった。そこで貨幣の大量な官鑄と大量な私鑄とが相伴して生じ、貨幣の大量な放出と大量な蓄積とが同時に併存し、貨幣の度々の平価切り下げと幣制を整理する措置、これらは大量の幣材と良幣を富家へ追いやって封をして置かれ、貨幣は中間環節に沈澱し、これは「流通阻塞型」の錢荒と言われている。崇寧以後については、史料不足のために論ずることができない。次に幾つか認識した点を述べてみたい。

第一、あるひとつの歴史時期の鑄錢業の発展は、この歴史時期の商品経済の発展水準を反映する外に、またこの歴史時期の鉱山の採掘、金属の製錬、加工熔鑄等一系列の手工業の総合的な発展水準をも反映している。中唐から北宋の前半期までの官營鑄錢業の衰微は、この時期、2世紀の長期にわたった工鉱手工業の低落期があったことが反映されている。これと相平行して、農業商品経済の発展は戦乱が頻繁した五代の時期に破壊されたことを除いては、相対的には大きな発展趨勢を呈している。相対的に安定的な発展をする農業商品経済と長期不振的な工鉱手工業生産とは、明らかなコントラストを形成し、貨幣の供給は深刻な不足状況なので、「谷帛陶片」、「鉄葉皮紙」と致してみな錢と為った。ずっとそのままの状況が続き、北宋の中葉になって中国の工鉱手工業の発展は、わずかにまた一つの高峰を出現したが、南宋にはまた衰微に趨き、この状況がずっと延長し続け、明の中葉になってようやく比較的大きな回復があった。中国の工鉱手工業と農業とは併行して数千年にわたって発展したが、繁栄の時期は短く、逆に不況の時期が長い。わずかに幾つかの期間に短い高蜂期はあるが、封建王朝の盛世期と重合しないことは無いが、戦争が工鉱業を破壊するのは、農業とその他の手工業よりも甚だしく、この点が解釈できる外に、おそらく歴代王朝がずっと鉱山採治を商品生産の外に排除していたことと関係があるのかも知れない。一脈相伝の崇本抑末（重農輕商）政策と独占的な生産とが、工鉱業の発展を厳しく束縛し、中国工鉱業の技術水準を長期にわ

たって進展させない状態にさせた。ずっと清末の咸豊、同治年間まで、当十銅大銭を鑄造しても元本を割ることは、この点を証明するに足りる。<sup>(54)</sup>

第二、労働価値論の角度から認識すれば、工鉞手工業の水準が農業よりも相対的に遅れをとったことが、銭荒の実質的な根源である。これは幣材の産量の増長を制約するばかりでなく、貨幣の長期に存在した値と価との平衡を失った状態を決定した。歴史上に発生した貨幣の私熔と私鑄は、直接であれ間接であれこれに根源を持つのである。孤立させて見れば、虚価を高騰させた大銭は紙幣と同じ種であり、単に価値の符号であるに過ぎない。マルクスは、「価値の符号は—これは紙或いは純分を下げた金銀を問わない—どのような比例によって造幣局の価格に基づいて計算した金銀の重さを代表するのか、しかもこれらの符号自身は決定する物質ではなく、それらが流通する中での数量によって決定されるべきものである<sup>(55)</sup>」と言っている。大銭を鑄造することは、理論上では正確で実行できることである。しかし大銭を鑄造することを独占して多くを放入し、具体的に金属貨幣のシステムの中で考察すれば、即ち新旧貨幣の比価の混乱をもたらす。大銭が先に行われて私鑄が後に付いてくるのは、中国貨幣史でこの外に例がない。結局のところは、価値の規則がまた大銭の名義の価値をもう一度實際価値の水準に戻させ、根本的に銭荒問題を解決できないだけでなく、徒に幣制の混乱を増した。ここに我国清末期の優れた貨幣学者であった王茂蔭の話を用いると、「折当過重、其罷尤速」、「自来行鈔可数十年、而大銭無能行数年者<sup>(56)</sup>」とある。残念なことは、この理論がずっと後の19世紀の50年代に始めて発現されたことである。

第三、太祖は軍隊から身を立てて天下に君臨したので、唐代の藩鎮割拠の原因がどこにあるのかをよく知っており、また五代末年の戦乱を自身で

(54) 据彭澤益『1853～1868年の中国通貨膨脹』、鑄当十銅大銭工銀7文、料銀7文、共14文、面值当十、虧4文。見『中国社会科学院經濟研究所』集刊第1集、中国社会科学院出版社版。

(55) 『馬克思恩格斯全集』第13卷、人民出版社版1965年版、第110頁。

(56) 『論行鑄大銭折』、『王侍郎奏議』卷六。

経験していたので、即位の初めは優厚な物質の待遇をもって勳臣武将の手の中の権力を取り換える政策を実行した。これは趙宋の歴代の帝王に対して、影響が甚だ深い。彼は曾て言っている。「所謂富貴者、不過欲多積金錢，厚自娛樂，使子孫頭榮耳。汝曹何不積去兵權，挾好田宅市之，為子孫立永久之業」。<sup>(57)</sup>北宋の官、軍の俸餉制度は、太祖のこの指導思想を正に体现していると言える。完璧な実物の供給制は、各級官吏の基本的な需要を保障し、大量の貨幣薪俸が集められて蓄積され、用いて「厚自娛樂」を以てし、広く田宅を置き、北宋独特の経済現象—高鑄幣量の条件の下での銭荒を形成した。これは確かに今後続けて研究すべき大題目である。

### 訳者あとがき

本論文は、袁一堂氏（1951年生、山東建筑材料工業学院社会科学部講師）が「歴史研究」（1991年、第4期）に発表された論文である。訳者は、北宋の財政状態を全体的に解明するための一手立てとしてこの論文に興味を覚え、翻訳を試みた。

北宋の銭荒に関して日本の学界では、『中国社会経済史語彙』正編（星斌夫編、光文堂書店、1981年）の銭荒の項に、「紙幣が流通すると、本位貨幣たる銅銭は市場から消え、多く富家の家に死蔵され、いかに政府が新銭を鑄造しても忽ちにして大資本家に吸収せられて市場から姿を消す。こういう状態を銭荒という」とある。なおこの論文を翻訳するにあたっては、日野開三郎氏、宮崎市定氏、曾我部静雄氏などの諸先生方が論究されている論著を参考にした。

なお、この論文の素訳は沙鄭軍氏（本学大学院前期課程修了、蘇州大学歴史系助理研究員）が試み、訳者が推敲し論考を構成した。この場を借りて御協力戴いた沙氏に感謝申し上げたい。

(57) 邵伯温。『邵氏聞見録』巻一。